

北斗句会選句（2年11月）

<五十音順>

大崎石州

特選

NO, 28 声明や紅葉降りしく平林寺

僧侶が唱える声明が辺りに満ちる紅葉華やかな平林寺、降り敷く紅葉、情景も良く、映像の切り取りとリズムそれに五感にうったえてくるのが良い。

選

NO, 6 栗飯の栗数競ふ子等の声

栗ご飯を前にして子供たちの歓声と喜び、栗の数を競うという捉えが面白い。

NO, 24 常連の減りゆく集い秋時雨

何の集まりか？それが分かれば更に良いのではないか・。

NO, 26 鈴虫のソプラノ響く村の宿

鈴虫の音色をソプラノに例えて捉えたのが面白い。

NO, 42 庭先の木犀の香や母忌日

母親を想う気持ちが良く現れている。

太田黒幸風

特選 NO、1 流線を底に映して秋の水

綺麗な小川、流線を底に映しての表現が奥ゆかしい。
格調高い句に感じられる。

選 NO, 6 栗飯の栗数競う子等の声

食卓を囲んでいる子等の姿が彷彿とする句

NO、22 満天に届けとばかり虫すだく

原っぱの虫たちが腹いっぱいので鳴いている姿が目につかぶ句

NO、35 宿坊の闇を深めて鉦叩

静かな宿坊の庭で鳴く鉦叩、この鳴き声が止んだ時にかえって深い闇を感じさせる情景が解る。

NO、36 久々に画廊を巡る文化の日

文化の日と言っても特に何をやるか浮かんでこないが、そうか画廊巡りかと思いださせる句である。静かな文化の日にぴったりの句

大森康正

特選

NO. 13 夕映えを叩き釣り上ぐ紅葉鮒

夕焼け空を背景に、鮒が暴れる様子を「叩く」とした措辞が上手い。

「紅葉鮒や夕映え」の色彩により、明るく心地よい句となった。

選

NO. 22 満天に届けとばかり虫すだく

虫たちの絶頂の生命力が表現出来た。広い叢から、隙間なく途切れなく続く、虫の声の勢いが感じられる。

NO. 28 声明や紅葉降りしく平林寺

「声明と紅葉降る」の音により、秋の平穏な静けさが表現できた。

心身を委ねたい安らぎの空間が生まれた。

NO. 29 同じこと繰り返す日々神の留守

神々は、自分の社から出雲へ旅立ち、日常でない生活が出来ているのに・・・自分は「成すに成せない・・・」の心境。季語が絶妙。

NO. 30 コスモスや風に光に揺らされて

「光に揺らされ」ポエムがあり良い。上五の切れにより、物語が発展した。

竹内雲泉

特選

NO. 13 夕映えを叩き釣り上ぐ紅葉鮒

この時期の鮒は、大変美味しいと聞きます。叩き釣りをして釣り上げたとのこと。時は夕暮れ時でしょうか？水面をたたいた際の夕映えが美しく、釣り上げた時の釣り人の嬉しそうな雰囲気伝わりました。

選

NO. 1 流線を底に映して秋の水

秋の川の流れは、澄んでいて川底まで見通せます。流れの波紋が底に映っている様子、爽やかな気分になります。

NO. 17 時々霜降りも買ふ生身魂

「おめでとうございます」、少し羨ましいが一族揃って両親を祝う。(時々とは)今回は、「霜降り」とあるので「魚」ではなく、牛肉でしょうか？

NO. 22 満天に届けとばかり虫すだく

少し田舎の方ですね。満天の星空を見上げつつ、虫の賑やかな声が空深く届けと・・・美しい景ですね。

NO. 31 笑栗の悲鳴も知らず靴の底

栗林へ行き栗拾いをしたのでしょうか。「いがぐり」を「笑栗」で表現されたのが、中句の「悲鳴」と共鳴していて良いと思います。

田中資凡

特選

NO. 20 何時までか二人で聞ける虫の声

上五の「何時までか」に、はっとさせられる。作者の心情が鮮明に伝わり、それだけで詩になっている。

選

NO. 6 栗飯の栗数競ふ子等の声

栗飯に喜びはしゃぐ子等の食事時の景、楽しい句。

NO. 27 ヒマラヤの塩のひとふり衣被

不思議な句だ。いのちを支える貴重な塩をひとふりするとは、人間の厳粛な営み、祈り、儀式めいたものを連想させる。

NO. 28 声明や紅葉降りしく平林寺

平林寺は紅葉で有名な寺、「声明や」との感嘆は、実感を的確に捉えている。

NO. 38 一村の白昼締まる鴉の声

鴉の音が、白昼の村全体を締めるがごとく聞こえるという、上五、中七の措辞が巧み。

長池豆陽

特選

No. 1 3 「夕映えを叩き釣り上ぐ紅葉鮒」

夕映えの水辺の静、ばらけないように撓りを鋭く効かせる竿さばきの動、宙に踊る紅葉鮒の彩のハーモニー。動画を見ているような、美しい叙景句

選

No. 2 3 「蔦もみじ地層の秘める太古かな」

地層がむき出しの崖と蔦紅葉の対比。一見無機質な景も、地質学に興味のある人には、無上のロマンの世界であるらしい。理解できる。秘めるは秘むるに。

No. 2 4 「常連の減りゆく集ひ秋時雨」

実感を共有。集いの内容によって理由は多様であろうが、今年はコロナウイルス禍や寒い長雨も共通してあろう。コロナウイルス禍の終焉が待たれる。

No. 3 1 「笑栗の悲鳴も知らず靴の底」

割る、つぶす、折るなどなど、足の動作は概して粗暴的。すでに割れている笑栗でさえ、靴底で踏んで実を取り出す。確かに残酷。諧味十分。

No. 3 5 「宿坊の闇を深めて鉦叩」

外国人には騒音に聞こえるという虫の音と寺院の取り合わせ、私たちには動中の静として癒される。作者は闇の濃淡にも作用するという。俳人の心ぞ佳

深見十萬

特選

23 番の句 「蔦紅葉地層の・・・」

紅葉と地層から遠い昔を偲ぶことを二句一章でまとめたのがよい。

選

1 番の句 「流線を底に・・・」

水底の良く見える秋の水の様子が良い。

17 番の句 「時々は霜降り・・・」

たぶん、自分のことを言っているのだろう。

29 番の句 「同じこと繰り・・・」

まさに、この句の通りの生活です。

35 番の句 「宿坊の闇を・・・」

秋の夜の寺の情景が見えるようだ。

藤田紀潮

特選

NO. 28 声明や紅葉降りしく平林寺

平林寺は関東を代表する禅寺の一つとか。広大な境内に紅葉が降りしきるなか、本堂からは声明（しょうみょう）が聞こえてくる。視覚と聴覚を効かし、韻律も心地良い句。

選

NO. 15 朝霧の奥より人の気配して

誰もが秋の朝の散策などで実感したことがある景。散文調が座5の連用形の技法で俳句に。

NO. 33 秋の夜朝刊ひらき爪を切る

諧味。昔の人は、夜に爪を切るなど戒めたが今は堂々と「爪を切る」と。いっそのこと「夕刊」では？ 上5は「秋の夜や」も。

NO. 35 宿坊の闇を深めて鉦叩

中7「闇を深めて」は、当句会でもやや常用の感のある措辞であるが「宿坊の鉦叩」で佳句に。

NO. 38 一村の白昼締まる鴉の声

白昼、きりさくような鴉の声に静かな村は一瞬にして引き締まった。中7が秀逸。

森田光彦

特選

NO. 28 声明や紅葉降りしく平林寺

静かな寺の情景が目に浮かび、訪ねてみたい気がします。

選

NO. 17 時々霜降りも買ふ生身魂

措辞に庶民のささやかな気持ちが詠まれ季語が生きています。

NO. 22 満天に届けとばかり虫すだく

静かな田舎の情景、懐かしいかぎり。

NO. 27 ヒマラヤの塩のひとふり衣被

「ヒマラヤの塩」に夢を感じます。

NO. 37 秋空や思い思いの羊雲

どれも同じように見える羊雲、よく見ればすこしずつ違っている。
措辞の「思い思い」が、すばらしい。

山縣秀雄

特選

NO. 6 栗飯の栗数競ふ子等の声

食卓を囲む景が良くでており、栗飯の栗の数や大きさを言い合った体験が懐かしい。

選

NO. 20 何時までか二人で聞ける虫の声

中七「二人で聞ける」を老夫婦とすれば句全体の老夫婦の景が良く分かり、虫の色も身につまされる。

NO. 22 満天に届けとばかり虫すだく

満天と虫の大小取り合わせが良く、景が大きく虫のコーラスが心地よく響く。

NO. 27 ヒマラヤの塩のひとふり衣被

季語の景がよくわかり、塩をヒマラヤ塩と詠んだ意外性が良い。

NO. 35 宿坊の闇を深めて鉦叩

宿坊と鉦叩の取り合わせがよく、中七「闇を深めて」が利いている。

吉岡誠山

特選

NO. 24 常連の減りゆく集い秋時雨

まだ若いと思っていたのに、いつの間にか仲間の集まりにも歯の欠けるように、参加者が減って行く寂しい様子を読み込んでおり、なんとなく寂しくなる。

選

NO. 7 早去ねと急かす畑の虫の闇

虫の邪魔者は早く立ち去ってほしいという気持ちが、簡潔に読まれているのが良い。

NO. 18 鎌先をぴよんぴよん逃ぐる飛蝗かな

飛蝗の軽快な逃げる動作が読まれており良い。

NO. 20 何時までか二人で聞ける虫の声

何時まで二人で虫の声を聴くことができるのかと、衰えゆく体のことを考えると寂しくなる気持ちがよく読まれている。

NO. 26 鈴虫のソプラノ響く村の宿

政府のGOTO施策の宣伝のような村の宿の様子が読まれており、時宜を得た様子が読まれており、諧みを覚える。